

GOD WITH US

Part 8: JESUS

Message 10 – Tradition-Crasher: Why the Religious Leaders Hated Jesus

神は我らと共に

パート8：イエス様

第10メッセージ-伝統破り：

なぜ宗教指導者たちはイエス様を憎んだか

はじめに

イエス様は十字架刑を受けられた。父なる神が、世の罪のための犠牲の死を負わせるために、イエス様を世に送り出されたからである。神は、イエス様が十字架に連れて行かれる手段に人間を用いられた。ローマの指導者たちは、その権限のゆえに、死刑を課すことに関与したが、イエス様を殺そうと企んだのは、ユダヤ人の宗教指導者たちであった。イエス様が、彼らの権威、信仰、ローマ人の仲介による穏やかな安定性に対する脅威であると見たからである。宗教指導者たちは、父なる神がイエス様を世に送られたことを認めたくなかったので、心の深いところで、イエス様を拒絶した。このことをイエス様に対する憎しみであるとイエス様は言われた：

わたしを憎む者は、わたしの父をも憎む。もし、ほかのだけれもがしなかったようなわざを、わたしが彼らの間でしなかったならば、彼らは罪を犯さないですんだであろう。しかし事実、彼らはわたしとわたしの父とを見て、憎んだのである。それは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と書いてある彼らの律法の言葉が成就するためである。（ヨハネの福音書15：23－25）

この学びでは、イエス様を拒絶するように導いた主な6つの要素について検討していきます。

1. イエス様は宗教指導者たちの一線を越えられた。

パリサイ派は、イエス様の時代に最大かつ最も影響力のあるユダヤ教内グループであった。彼らは一般の人々に大きな権威を持っていた。その名（「パリサイ」とは「分離した者」を意味する）、義である人々は不義の人々から分離するべきだと考えていた。彼ら自身と「罪深い」とみなされる人々との間に「一線を引いた」。

イエス様は、線を引く代わりに線を越えられた。イエス様は「無宗教者」や「不義」な人々と時間を過ごされた。それは、宗教指導者を大きくかき乱し、イエス様に不当なレッテルを貼り、嘲た。イエス様がユダヤ人の収税人であるマタイ（ラビ）を十二人の弟子の一人に加えた際、それが最も明白に記されてある。

さてイエスはそこから進んで行かれ、マタイという人が収税所にすわっているのを見て、「わたしに従ってきなさい」と言われた。すると彼は立ちあがって、イエスに従った。それから、イエスが家で食事の席についておられた時のことである。多くの取税人や罪人たちがきて、イエスや弟子たちと共にその席に着いていた。（マタイの福音書9：9－11）

当時、他の人と食事をするのは、友情の兆候であった。イエス様のこの様な人々との絶え間のない結びつきは、パリサイ人がイエス様を「食をむさぼる者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の友」として批判した（マタイ11：19）。イエス様の反応は、宗教指導者たちがイエス様の使命と方法、そし

て「罪人」という言葉の定義をいかに理解していなかったかを示す。

パリサイ人たちはこれを見て、弟子たちに言った、「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人などと食事を共にするのか」。イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

(マタイの福音書 9 : 12, 13)

イエス様の使命は、必要としている人々に神の愛と赦しのメッセージを伝えることであった。パリサイ人の問題は、人々との間に「線を引き」ただけでなく、自身の罪と救い主の必要性に盲目となっていたことである。神の視点から見ると、彼らもまた、「線」の向こう側（罪びと側）に属していたことを認識していなかった。使徒パウロは、自分の罪を知り、クリスチャンになる前に、独善的なパリサイ人であった。パウロはアグリッパ王に証言した。「わたしは若い時代には、初めから自国民の中で、またエルサレムで過ごしたのですが、そのころのわたしの生活ぶりは、ユダヤ人がみんなよく知っているところです。彼らはわたしを初めから知っているのです、証言しようと思えばできるのですが、わたしは、わたしたちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人としての生活をしていました。わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、思っていました。」(使徒 26 : 4, 5, 9)。パウロは、ローマ人への手紙に、改宗後に理解したことを書き記した。

すると、どうなるのか。わたしたちには何かまさったところがあるのか。絶対がない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にあることを、わたしたちはすでに指摘した。
(ローマ人への手紙 3 : 9, 23)

ルカの福音書だけに見られる取税人とパリサイ人の比喻は、その原則を強く示している。神からの慈悲は、そのために叫び求める人々に流れ込む。

自分を義人だと自任して他人を見下げている人たちに対して、イエスはまたこの譬をお話しになった。「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとりパリサイ人であり、もうひとり取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりどころ祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとしないうで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』と。あなたがたに言うておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

(ルカの福音書 18 : 9-14)

神は、「自分を他者よりも聖い」とする人の心の態度を嫌われる。イエス様の聖なる基準に照らして、如何に私たちが神の愛と赦しを浮けるに値しないか(マタイ 5 : 3でイエス様が言われた「霊的貧困」)を認識する必要がある。あなたの内にいかなる霊的誇りの痕跡をも明らかにしていただくよう祈りましょう。

誇りは、他者と自分を比較して、自分がより優れていると思ふときに起こる。他の人は標準ではない！重要なことは、イエス様が何を見ておられるかである。イエス様の慈悲は、誰でも受けることが可能であるが、先ず、自分自身を徴税人と同様に罪びととみなす必要がある。徴税人は慈悲と赦しが必要である。それから、神はその必要性を認識する人々に慈悲のメッセンジャーとして、私たちが用いたいと願っておられることを認識する必要がある。「悪い人」を避けてきたことはありませんか？あなたの近くに神の愛と赦しを絶望的に必要とおられる人に、神の驚くばかりの恵みのメッセージを伝えるためにあなたを用いたいと願っておられる人を明らかにしていただきましょう。

2. イエス様は人の傲慢さを拒絶された。

イエス様の時代のレビ人（ユダヤ教師）には、女の従者がいなかった。対照的に、イエス様は、女たちがご自分の人生と使命において重要な役割を果たすことを歓迎された。女たちは自分たちの個人的な手段からイエス様の使命を支持した（ルカ 8：1-3）。ベタニヤのマリアには、イエス様の死と埋葬の準備のために油を注ぐという名誉を与えられた（ヨハネ 12：1-8）、イエス様の弟子たちが彼女を叱責した際、イエス様によって保護された。「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。」（12：7）。マグダラのマリア（ヨハネ 20：10-18）は、イエス様の復活の最初の証人として用いられた。イエス様は女性のに置かれる価値と平等な機会をお許しになったことは、ある日のパリサイ人の家においての食事会で示された。

あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家には行って食卓に着かれた。するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。（ルカの福音書 7：36-39）

パリサイ人は、次の事柄に対してショックを受けたに違いない。1) この「罪深い女」が、パリサイ人の家における個人的宴会の中に入ってきたこと。2) イエス様が、宴会に招かれている間に、その女に敬意と注意を捧げられたこと。3) 「罪深い女」が個人的な方法でイエス様に触れることをお許しになられた。イエス様は、彼らが抱いた軽蔑に反応され、大きな借金を免除された債務者とそれよりも借金が少ない債務者の二人についてのたとえ話をされた（ルカ 7：40-50）。より大きな借金を免除された人の方が、感謝の気持ちによってはるかに動かされ、より多くを愛したということが要点であった。そして、イエス様は、この「罪深い女」をパリサイ人よりも高く評価されたのである。

それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家には行ってきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいっ

た時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。 (ルカの福音書7：44－47)

当時、訪問客には、3つを提供することが慣例であった：1) 足からほこりを洗い流すための水、2) 歓迎の兆しとしての頬へのキス、3) 体臭の消臭剤として作用する香油。パリサイ人のシモンは、それらをイエス様のために提供しなかった。しかし女は、自分のやり方で、3つとも提供した。イエス様は、女があなた (とあなたの友人) よりもはるかに私を愛していると仰っているのである。最期に、イエス様は3つの力強い声明をもって女を返された。あなたの罪は赦された。あなたの信仰があなたを救った。平安に行きなさい。

男たち：私たちは、女性が男性に不当な扱いを受け、虐待されている世の中に生きている。その結果、女性たちは尊敬と尊厳のために叫び続ける。男性と女性の両方に神の神聖なイメージが同様に与えられている (創世記1：27)。イエス様が女性を称えられる模範は、あなたの周りの女性たちを敬うために、どの様にチャレンジしますか？ 自宅、職場、学校、チーム、コミュニティではいかがでしょうか？ あなたが女性を虐待したり侮辱したりする領域はありますか？ あなたの影響力の範囲内で女性をどの様に上昇させることが出来るでしょうか？ あなたの女性の扱い方は、あなたを見ている人に大きなメッセージを送るということを忘れないでください。イエス様の足跡を歩み、「いのちの恵みを相続する仲間として、女に栄誉を与える」 (第一ペテロ3：7)。

3. イエス様は、彼らの伝統を無効にされた。

パリサイ人は、「長老の伝統」と呼ばれる律法を尊重した。それは、レビ人である教師たちがモーセの古代の律法を新しい状況に適用させることを目的に、数百年にわたり、暗記して、口頭で伝えられてきた教えであった。パリサイ人たちは、それらの律法を神によって書かれたみことばと同等の権威を持つものとしてきたが、イエス様は、その様な聖書に付け足された伝統について、まったく異なる見解を持っておられた。 (この問題についての完全な説明は、マルコ7：1－13を参照)。

イエス様は、安息日の「余分な律法」を破られた。彼の使命の中で、重要な問題として強調された。多くの例外的な規制が安息日に追加されていた。本来の戒めは、安息日には「仕事をしてはならない」であった (出エジプト記20：8－11)。しかし、ラビは、いかなる形の「仕事」についてかを非常に詳細に焦点を当てた。安息日に何歩歩けば「仕事」とみなされるかを指定したり、穀物を食べることは可であったが、もし手づかみにして籾殻を取り除くことは「脱穀」とみなされ、それは「仕事」とみなされた (マルコ2：23－28参照)。また、安息日には、人を癒してはならないと言った。イエス様は、その概念を拒否された。なぜなら、人を癒すということは安息日に「良いことを行っている」ということであり、誰かが安息日に「良いことをしている」のであり、それは魂に喜びをもたらす。彼らはそのためにイエスを憎んだ：

イエスがまた会堂にはいられると、そこに片手のなえた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた。すると、イエスは片手のなえたその人に、「立って、中へ出てきなさい」と言

い、人々にむかって、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言われた。彼らは黙っていた。イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そこで手を伸ばすと、その手は元どおりになった。パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。

(マルコの福音書 3 : 1 - 6)

とりわけ、彼らはイエス様を憎んでいた。イエス様はご自身を「安息日の主」と呼ばれたかあらである(マルコ 2 : 28)。神を敬うためになされたその日の上に、神の権威を持っていると主張された！

オークポイント教会の八つの弟子の定義の一つは、神の御声を聞くことである。それは神のみことばである聖書を重んじるということの意味する。イエス様の時代も、今日も、人々は余分な聖書の教えを蓄積し、聖書の66冊に含まれる神のみことばと同等、もしくは、それ以上の価値を持つかの如く扱っている。聖書のみことばに追加する(またはそれから減算する)とき、パリサイ人の誤りに陥る。あなたはいかがでしょうか？実際に聖書を読むよりも、他の「宗教的」または「霊的」文献を読む傾向がありますか？今日、聖書を読む時間を費やす人は稀である。あなたは神のみことばと同等以上に価値を置く権威の源はありますか？あるいは、何らかの形で神のみことばから差し引いておられますか？神の御声に毎日耳を傾けておられますか？

4. イエス様は、彼らの心を叱責された。

イエス様は、彼に従うことを選択しなかった人々(例えば、金

持ちの若い支配者、マルコ 10 : 21)を含めて、大部分の人々に対して、慈悲を示された。しかし、宗教指導者に対して非難を強いられたのは、彼らには神の道で人々を救う責任があったからである。にもかかわらず、彼らは邪悪で利己的な動機から人々を神の道から逸らして導いていた。更に、イエス様を信じるならば、ユダヤ人のシナゴグ(ユダヤ教会堂)から人々を追放した(参照: ヨハネ 12 : 42)。マタイの福音書第12章では、イエス様の行われたある奇跡の後、イエス様とパリサイ人との間の葛藤は頂点に達し、イエス様は悪魔の使いであると非難した。

しかし、パリサイ人たちは、これを聞いて言った、「この人が悪霊を追い出しているのは、まったく悪霊のかしらベルゼブルによるのだ」。(マタイの福音書 12 : 24)

それに応じられて、イエス様は後退され、彼らを非難された。1) 「神の国はすでにあなた方の所に来たのである。」たとえ彼らがそれを受け入れるには頑なであったとしても(マタイ 12 : 28)。2) 「赦されない罪 - 神の御霊の冒瀆」(マタイ 12 : 31, 32)を犯す寸前にいると警告された。3) 「悪で満たされ、良い言葉を話すことができない」と言われた(マタイ 12 : 34)。4) 「しるしを渴望する邪悪な世代だが、イエス様の死人からの復活を除いては、もはやそれ以上の印しはない」と告げられた(マタイ 12 : 38-40)。5) 古代のヨナの宣教によって悔い改めたニネベ人の人々が、裁きの日に彼らを罪に定めると語られた(マタイ 12 : 41)。6) 「イエス様ではなく、彼らの内に悪霊が住んでいて、悪魔が満たされた状態は更に悪くなる」と言われた(マタイ 12 : 43-45)。

イエス様は、パリサイ人を愛しておられなかったのですよ

うか？そうではない。イエス様とニコデモとの会話をみてきた（ヨハネ3章）。また、ニコデモとアリマテアのヨセフの両方がイエス様を信じて、イエス様のご遺体に適切な埋葬を与えたことも見て来た（ヨハネ19：38-42）。人々を神の道から逸らせて導いていた心が頑ななパリサイ人たちに厳しく非難されたのである。このことに驚かされることはない。旧約聖書では、神は羊飼いを導いている偽りの羊飼い（エゼキエル34章）に厳しい言葉を抱かれるとあり、また、新約聖書では、使徒ヤコブは霊的な教師の立場に立つ人たちには「厳しい裁きが下される」と警告している（ヤコブ3：1）。（マタイは、これらの指導者の偽善に関するイエス様の説教に全章（第23章）を捧げた。）。

霊的な「心の頑なさ」は、人々が神のみことばに耳を傾けることを繰り返し拒否するにつれて起こる状態である。ヘブル人への手紙は、人々が神に逆らって心を頑なにすることを警告するために書かれた（参照：ヘブル人3：8、15、4：7）。神は、人に忍耐強くあられるが、ある時点で、自身の欲望へと任される（ローマ人への手紙1：24、26、28）。自分で気づいておらず、自身や他の人々に影響を与えている「頑な」な思考や行動の分野に注意を払うように努めてくれるのは、人生において、自分ことを最も良く知っている人たち、また、最も心配してくれる人たちである。あなたの人生において、神があなたの注意を喚起しようとしていることを、あなたを愛している人を通して知ったことがありますか？彼らの穏やかな指摘に対して、どの様々に反抗してこられましたか？神は、あなたに何を求めておられるのでしょうか？

5. イエス様は、彼らのねたみをかき立てられた。

一般の民の中でのイエス様の人気は宗教指導者たちにとっ

て大きな脅威であった。大勢の人々が3年間（以前、バプテスマのヨハネに群がっていたのと同じ様に）、イエス様に群がっていた。イエス様は、十字架につけられるまでの最後の数週間で、死者の中からラザロを甦らせ、大々的な群衆によって、ユダヤ人の祝祭のためにエルサレムへの勝利の入城に導かれた（ヨハネ12：12-18）。宗教指導者たちは、彼らがコントロールを失っていることに気づいた。指導者たちはイエス様を阻止するために素早く行動する必要があった。

そこで、祭司長たちとパリサイ人たちは、議会を召集して言った、「この人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」。（ヨハネの福音書11：47, 48）

イエス様が死ななければならないと宣言したのは大祭司カヤパであった。ローマ軍がすべての騒動を沈黙させてしまわないようにするためであった。

ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が減びないようにするのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」。（ヨハネの福音書11：50）

こうしてイエス様は、金曜日の朝、過ぎ越し祭の朝、ローマの総督であるポンテオ・ピラトの前に立たされた。ユダヤの指導者たちは、イエスがカエザルに対する反乱を率いていたという罪をでっち上げたが、ピラトは、その企みを見抜き、何が彼らの心の中で糸を引いていたかも知っていた。そこでピラトは、彼らがイエス様に対する真の意志を明らかにする

よう試みた。イエス様を調査したが、偽善者であり、カエザルへの反逆をかき立てる根拠は見つけられなかった。そこで、暴動と殺人のために刑務所にいたバラバというユダヤ人の極悪凶人を解放するか、または罪を犯さなかったイエス様を解放するかという選択肢を提案した：

ピラトは彼らにむかって、「おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか」と言った。それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。

(マルコの福音書15：9，10)

ピラトは、イエスに対する彼らの真の問題が暴力ではなく、ねたみであったことを知っていた。でなければ、なぜ有罪判決を受けた犯罪者が解放され、無罪の者を十字架につけることが出来るであろうか？ 彼らは、カエザルに対する脅威は全く気にせず、自分たちへの脅威のみを気にした。

ねたみ—他人の持っているものを欲しがらる欲求—私たちが他の人を見て比較する心に根付いている。それで、私たちは人生は「不公平である」、自分も彼らの配分に相応しいと結論づける。ねたみは、不公平さについて不平不満につながり、また、私たちの公平な分け前を得る方法を企ませる。コリント人への手紙第一13：4では、「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らないと言っている。あなたの心にねたみが湧き出ていないでしょうか？ あなたは何について最も神に不平を言われますか？

6. イエス様は、彼らの神であると主張された。

イエス様は、次々に、ご自身について主張され続けたので宗教指導者を怒らせた。イエス様は絶え間なく神の威厳をもって話された。ヨハネの福音は、イエス様の神性の主張を強調している。

そこで、イエスは彼らに答えられた、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。このためにユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうと計るようになった。それは、イエスが安息日を破られたばかりではなく、神を自分の父と呼んで、自分を神と等しいものとされたからである。(ヨハネの福音書5：17，18)

よくよく言うておく。もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることはないであろう」。ユダヤ人たちが言った、「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今わかった。アブラハムは死に、預言者たちも死んでいる。それなのに、あなたは、わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろうと、言われる。あなたは、わたしたちの父アブラハムより偉いのだろうか。彼も死に、預言者たちも死んだではないか。あなたは、いったい、自分をだれと思っているのか」。

(ヨハネの福音書8：51－53)

あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」。そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたはまだ五十にもならないのに、アブラハムを見たのか」。イエスは彼らに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れ

る前からわたしは、いるのである」。そこで彼らは石をとって、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。(ヨハネの福音書 8 : 56 - 59)

わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。わたしと父とは一つである」。そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、また石を取りあげた。するとイエスは彼らに答えられた、「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。ユダヤ人たちは答えた、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としているからである」。

(ヨハネ 10 : 27 - 33)

ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の英国教授であり、かつて無神論者であった C. S. ルイス教授は、イエス様の驚くべき自己主張に関して、次のような洞察力あるコメントを記している。

私は、「イエスを偉大な道徳的な教師として受け入れるが、神であるという主張は受け入れない。」という真に愚かなことを言う人々を無くす取り組みをしている。それは、決して口にするべきでない発言であるからである。単なる人が、イエス様が言われた様なことを言ったとしたら、偉大な道徳

的な先生ではないでしょう。ただの狂人である。でなければ、地獄の悪魔ということになるであろう。あなたは選択をしなければならぬ。この男は、神の御子であるか、それとも狂人であったか、あるいはそれ以下であったか。あなたの選択肢は、イエス様を愚か者と呼ぶか、唾を吐き、悪魔呼ばわりするか、または、イエス様の足元で、彼を主であり神であると認めるかのいずれかである。イエス様が素晴らしい人であり教師であるという選択肢など、私たちには与えられていない。
"C.S.ルイス - Mere Christianity より。

ディスカッションの質問

1. このレッスンで、イエス様について、新しく学んだことは何ですか？確立された伝統を破る6つのカテゴリーのうち、インスピレーションと個人的にチャレンジを見いだすのはどれですか？
2. 正当な理由なしに嫌われたり拒否されたことはありますか？そのときの感情はどんなでしたか？
3. ねたみから、あなたを落とそうとした、または、あなたの評判を台無しにされようとしたことがありますか？ねたみから、あなたがその様に働いたことはありますか？私たちの救い主であるイエス様ご自身が、個人的に指導者たちによるねたみを経験され、苦しまれたことを学ぶことは、あなたのイエス様への思いと心をどの様に動かされましたか？
4. 当時イエス様は、宗教指導者たちに衝撃を与える多くの発言をした。あなたの人生の物語の中で、イエス様を知ったとき、衝撃を受けたこと、困惑したこと、または彼について最も喜んだことは何ですか？

例：私、ボブは、私の罪のすべてを取り除くためにイエス様が十字架で死んでくださったというメッセージに完全に驚かされた。また、十分頑張っても、十分働いても、神の驚くべき恵みを「得る」ことは出来ないこと、それはイエス様から私への愛の無償の贈り物であったということに驚かされた。そして、私の遂行不足にもかかわらず、イエス様が私を愛し続け、私を用い続けておられることを謙虚に思い出します。イエス様は、まことに私の人生をかけて生きるに値する神です！